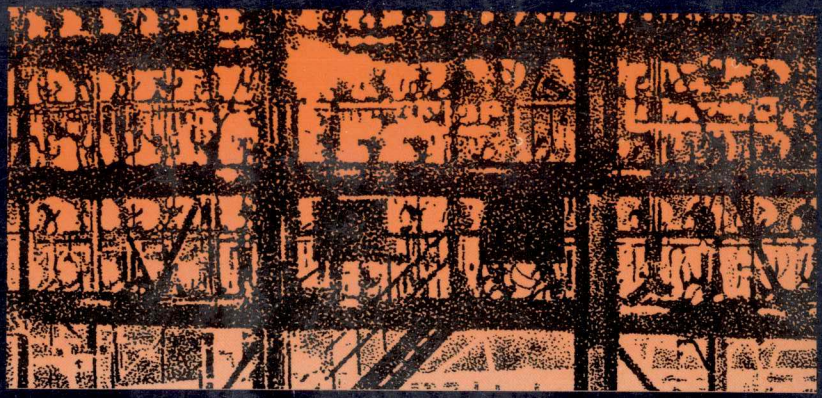

スーパースター

海老沢泰久

文藝春秋

スーパースター

海老沢泰久

海老沢泰久（えびさわ・やすひさ）
1950年茨城県生れ。国学院大学卒。同大学折口博士記念古代研究所勤務を経て、現在著述に専念。著書に『監督』、『F２グランプリ』（いずれも直木賞候補作）がある。

スーパースター

1983年10月15日　第1刷

著　者　海老沢泰久
発行者　西永達夫
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町３—23
電話　東京03(265)1211(代)

定　価　1000円
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　矢嶋製本株式会社

© Yasuhisa Ebisawa 1983　Printed in Japan

短篇小説集「スーパースター」目次

スーパースター　5
二人のランナー　45
記　録　87
イン・ザ・ホール　101
ライバル　157
もっとも愛するもの　177
眼下のゲーム　249

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

短篇小説集

スーパースター

装幀　坂田政則

スーパースター

プロローグ

「おい！　何をしとるんだ」

というデスクの声でわたしは目を覚ました。「会社は遊ばせておくために給料を払っているんじゃないぞ」

わたしはハイッといって椅子にちゃんとすわり直したが、いくらプロ野球記者だって、十年もやっていると少々うんざりしてくる。スリリングな試合ならあとで記事にするのも楽しいが、凡試合はどうしようもない。だいたい年間の九十パーセント以上は凡試合なのである。

しかし、そんなことを弁解の理由にしたって仕方がない。プロ野球記者なら誰でもそんなことは知っているので、バカにされるだけだからだ。

「何かやれ」

とデスクはいった。

わたしは反射的に電話にとびつき、担当チームのピッチャーの家に電話をかけた。今シーズンからトレードで新しくやってきたピッチャーだった。

彼は敗戦処理にたまに投げるといった、どこにでもいるようなピッチャーではなかった。前のチームに所属していた十二年間で百勝を越える勝星を上げ、そのうちの数年間はエースとしてローテーションの中心になっていたこともあるピッチャーだった。トレードの理由を、肩を壊したからだとか、腰に持病をもっているからだとかいう関係者もいるが、監督との不仲というのが真相のようである。わたしの担当チームはじつに利益の多いトレードをしたのだ。外野手をひとり失ったが、十勝を計算できる安定したピッチャーを獲得したのだ。じっさい、彼はこの春のキャンプですごいボールを投げてみせて、それを証明した。

ところが彼はシーズンが開幕してもう三カ月にもなるというのに、まだ二勝しか上げていなかった。わたしはそれがどういう理由によるものなのかをきくつもりだった。デスクにやる気をみせるための思いつきだったが、ひょっとしたら隠された苦悩なんてものがあって、五、六十行の感動的なストーリイが書けるかもしれないと思ったからだ。

だがわたしの感動的なストーリイの夢はあっさり消えた。彼が電話に出てきて、きょうは先発だから誰にも会いたくないといったのだ。

わたしはそれから二時間ばかり机にすわっていた。仕事をする気がないのに二時間もデスクの目をごまかすのは並大抵のことではなかったが、うまくそれをやりおおせた。だから球場へ行く時間がき

たときには、うれしくて飛びだしていった。

彼の調子はとてもよいとはいえない出来だった。ボールが先行し、トップバッターに四球目をバットの真芯でとらえられたのでそれが分った。レフトの正面に飛ばなかったら、長打になっていたにちがいない。つづく二番打者と三番打者にも真芯でとらえられた。しかしまた野手の正面で、三者凡退に切り抜けた。

二回はそうはいかなかった。四番打者を何とか打ちとったあと、五番打者に三遊間を抜かれた。そして六番打者。彼は必死の面持でシュートボールを投げこんだ。ゴロは彼の狙いどおりショートの前に転がった。彼はマウンドの上でグラブをポンと叩いた。ダブルプレーだ。その瞬間、ゴロはショートの股のあいだを抜けて、外野へ転がっていった。一死一、二塁。彼はトンネルしたショートに対して何もいわなかったが、ガックリと肩を落とした。彼は何とか気をとり直そうとしたが、七番打者が打ち気満々でボックスにはいったのはもっとはやかった。キャッチャーがタイムをとってやればいいのになあとわたしは思ったが、キャッチャーは何もしなかった。彼は絶好球を投げて、それをレフトスタンドに打ち返された。

結局、彼はそれで終りだった。つぎの回に打順がまわってくると代打が出て、彼はベンチに引っこんだ。よっぽど調子がわるいにちがいなかった。そうでなければ、いかに三点を失ったとはいえ、先発投手が三回で引っこむなどということは常識では考えられない。

わたしは思いついて、ここ十日間のスコアブックを調べてみた。彼のこの日の登板は、じつに一週

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

間ぶりだった。やはり、中四日では投げられないほど、どこかがわるいのだ。それとも彼の投手生命は突然終りの段階にさしかかったのだろうか。

彼のチームはそのあと何とか四点をとったが、試合には負けた。二番手と三番手のピッチャーが、ごっそり相手に点をプレゼントしたからである。もっとも、どの失点もみんなエラーがらみで、内野手がトンネルするなどというのは序の口で、外野手が完全に捕れるフライを三つもポロポロやったのだから、何点とられても不思議ではない。この敗戦で、このチームは首位と十三ゲーム差の五位に落ちた。

試合終了後、わたしはロッカールームへ行った。別に何を取材するつもりもなかったが、ちょっと選手の様子を見ておこうと思ったのだ。彼らはシャワーを浴びるために裸になって、大口をあけて笑っていた。冗談をいって笑わせているのは、ひとりで二つもエラーした右翼手のようだった。五位に落ちたチームとはとても思えなかった。

ああ、このチームもおしまいだとわたしは思った。わたしがかつて知っていたこのチームは、こんな日は誰ひとりとして口をきかず、ミスをした選手などはコソコソ逃げださなければならないようなピリピリした空気に満ちていたものなのだ。

「やあ」

わたしの姿を見つけて、先発したピッチャーの彼が近づいてきた。「これから一緒にどこかへ行かないか？　何かききたいっていってたろう？」

わたしは原稿を書いてしまうから一時間だけ待ってくれと返事した。

彼は六本木のクラブにわたしを連れて行き、そこで、「何か食うかい？」とわたしにいった。「おれは飲むだけにするけど」

それならわたしもそうすると返事した。

「でも、やつは酒が大好きだなんて書かないでくれよな」

「書かれたことがあるのかい？」

「大阪のチームにいたときに二、三度書かれた。それ以来、どうもおれの年俸の伸び率がわるくなったような気がするんだ。監督はアル中みたいにおれを扱いやがるし、いいことは何もなかったね」

「ぼくがきみについて書きたいのはそんなことじゃないよ」

とわたしはいった。「百勝以上も勝っているきみが、どうして突然どこにでもいるようなピッチャーになってしまったのかってことなんだ。いいピッチャーが勝てないでいる姿を見るってのは、辛いんだ。ファンならなおさらだ」

「冗談じゃないぜ」

彼は水割りのグラスを一口あおった。「一番辛いのはおれだよ」

「どこかわるいのかい？　肩とか、肘とかさ」

「どこもわるいとこなんかないよ」

「じゃあ、ちょっとしたピッチングのコツでも忘れたのかい？」
「やっぱりそういう風に見えるのかな――」
と彼はいった。
「見えるよ」
「しかしおれはガキのころからもう二十年も球投げばかりやってきてるんだぜ。頭が吹っとばされたってピッチングのコツだけは忘れないね。そうだろう？」
「じゃあ、どうしたっていうんだい？」
とわたしはいった。「チームの状態がわるいんだから勝てないのはまあ仕方がないとしてもだよ、きみは防御率がわるすぎるじゃないか。五点台の防御率じゃ、運がわるくて勝てないんだとはいえないぜ。それに、ここんところずっと一週間に一度の登板だ。これは十勝以上を期待されてるピッチャーのローテーションじゃないよ。いったい本当の理由は何なんだい？」
「本当の理由か。それは話せないな」
と彼はいった。
「なぜなんだい」
「それを話したら、トレードされちまうからさ。おれだってもう三十だ。若いうちなら構わねえが、もうあちこちへ放り出されるのはいやなんだよ。まあ話せば面白い記事にはなると思うけどね」
「それならなおさらききたいね」

とわたしはいった。
「じつはおれも話したくてうずうずしていたのさ」
と彼は答えた。「もしおれがこのチームを出るか、おれが書いてもいいというまで書かないって約束するなら、話してもいいよ」
「約束するよ」
とわたしはいった。「裏切ったりはしない」
「オーケイ。おれの話を聞いたら、きっとこのチームを見る目がちがってくるよ。でも長い話だぜ」
「いいとも」
とわたしはいった。「さあ話してくれ」

1

「まず、おれがトレードされたときだ」
と彼はいった。
「おれは監督とうまくいってなかったから、きっとトレードに出されるだろうとは思ってたけど、それを待ってるのはいい気持じゃなかった。高校を出て十八のときから十二年間もいたチームだからな。しかし、行く先がこのチームだと分ったときには、何ていうか、おそろしくうれしかったよ。うまい具合に、おれのいたチームは左の外野手がほしくて、このチームは十勝級のピッチャーがほしかった

ってわけさ。おれはその晩、女房と二人で乾杯したくらいだ。

「おれたちはパ・リーグで何度も優勝して、日本シリーズでこのチームと戦ったが、一度も勝てなかったのは、あんたも知ってるだろう？　いつも一試合か二試合は落としてくれたが、おれにはパ・リーグの優勝チームに恥をかかせまいとして、わざと負けているのだとしか思えなかったね。それくらいこのチームの強さは凄かった。

「それにこのチームは人気がある。街に出れば、二軍からやっとあがったばかりのような選手でも、このチームにいるというだけのことで子供たちにサインをせがまれるし、球場はいつも満員。パ・リーグでは考えられないことだらけさ。だっておれは、わずか数百人の観客のなかで投げたことだってあるんだぜ。だから、このチームはおれにいわせれば天国のようなものさ。誰も信じないかもしれないが、おれは昔、破れたストッキングに、分らないようにツギを当ててマウンドにあがったことがあるんだ。若い選手はみんなそうやっていたからな。ところが、これはあとで分ったことだが、このチームには遠征先までも運動用具メーカーの社員がつきそってきて、破れもしないうちに何でもタダでとりかえてくれるんだ。ただ、新しいのが欲しいといえばいいのさ。

「ところが、年が明けて春のキャンプに参加して、おれはビックリした。何というか、これがあんなに強かったチームの練習かとあきれてしまったのさ。それは最初の日から感じたね。だって、誰も本気でやってないんだぜ。もちろん素人に分るほど手を抜いちゃいないが、何年かプロのメシを食ったものにならすぐに分るよ。ただ、決められたスケジュールを黙ってこなしているだけなんだ。時間だ

けはバカみたいに長かったがね。だから最初のころは夜になっても眠れなくて困ったよ。だってぜんぜん疲れないんだから。おれはどうしてこうみんなやる気がないのか不思議でしようがなかった。

「あんたたちマスコミの連中のなかには、その理由を、このチームの選手はあらゆる面で恵まれすぎているからだと主張するやつがいるだろう。ハングリーじゃないっていうわけさ。たしかに、なかには天国みたいな環境に慣れきっていい気になっている苦労知らずの若い選手もいるよ。しかしそんなやつは何年ベンチに待機していようが、クビになるまでレギュラーになんかなれないんだ。彼らは絶対にチームの浮沈を左右したりはしないのさ。だからそんなやつはどうでもいいんだ。しかし、子供たちにサインをしてやるヒマがあったら、そんなバカバカしいことはやめてバットの素振りをしたほうがずっといいと考えているような主力選手までがやる気をなくしているんだぜ。どういうことなんだい、いったい？

「しかし、まもなくおれはそんなことは気にしないことにしたよ。誰も気にしていないのにおれだけが気にしているのはバカみたいだからな。

「まあ、待てよ。それでおれもみんなと同じようにやる気をなくしてダメになったってわけじゃないんだから。

「おれはトレードが決ったとき、こう思ったんだ。この商売ってのはそういつまでもつづけられるもんじゃない。おれの場合は、せいぜい頑張ってあと五年、思いどおりのピッチングができるのは、そのうちの三年だろう。だから、できるうちに、やめてから後悔しないように精一杯のことをやろうっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook